

私たちはいま、長良川河口堰のゲートが閉め切られて15年目に、長良川の生物相調査の最終報告書を作成している。河口堰建設の是非を問う全国的なうねりの中で長良川下流域の生物相調査を開始してから20年目、最初の調査報告書の出版からは16年目になる。

私たちの生物相調査では、建設省・水資源開発公団（当時）の調査では対象にされなかった資源生物以外の生物にも目を向け、多数の生物種を発見し記録に残すことができた。私たちは河口堰が多くの生物や環境に深刻な影響を及ぼすであろうことを心配した。河口堰の影響をできる限り科学的に考察し、予測した点を報告書に発表したことは、当時としては私たちにとって大きなチャレンジであった。しかし、そのことが、長良川に対する愛着とあいまって、私たちが長期にわたって事後調査を継続できたことの原因力となったように思われる。私たちは事後調査の結果を河口堰運用後5年間にわたり開催された、「長良川研究フォーラム」において発表した。また、それらの結果をとりまとめて、財団法人日本自然保護協会発行の調査報告書「長良川河口堰が自然環境に与えた影響」（1999）に報告した。

私たちはその後も事後調査を続けた。影響の程度がはっきりしない点が多かったためである。河口堰の影響の現れ方は、多種多様であった。河口堰下流部のヘドロ堆積や堰上流のプランクトン相の変化、あるいは水質悪化など多くのことが理論的な予測通り、ゲート閉鎖後短期間で現れた。いっぽう、ヨシの死滅などのように私たちの予測の当否を判定するのに12年を要したものもあった。マシジミのように、大方の予測に反して、個体数を激減させたものもあった。

河口堰運用15年後の現在でもまだ変化が継続・進行している事象もあるが、それらの結末はだいたいの想像がつくまでになっている。長良川下流域生物相調査団としての調査活動は本報告書の出版をもって終了したい。これまで私たちの調査活動にご協力やご支援をいただいた多くの方々にご心よりお礼申し上げます。

長良川河口堰が、汽水域を破壊し、河川を湖沼化あるいは人工水路化し、長良川の自然環境を一変させたことに間違いはない。さらに奥伊勢湾の海底の環境悪化にも一役買っているのではないかと疑われる。その影響は漁業や観光業をはじめ流域住民の生活にもおよんでいる。おりしも、今年は「第30回全国豊かな海づくり大会 ぎふ長良川大会」が岐阜県で、「生物多様性条約第10回締約国会議（COP10）」が愛知・名古屋でそれぞれ開催される。この機会に、河口堰の影響評価が科学的になされ、長良川の復活について議論が深まることを願う次第である。